
薔薇乙女

an.l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇乙女

【Nコード】

N4748Y

【作者名】

an.l

【あらすじ】

少女は一人そっと微笑む。

愛しいあの人を想いながら…。

（前書き）

ずいぶん昔に書いた作品です。

大したものではありませんがこのまま消してしまうのは可哀想だな
と思い、掲載させてもらいます。

誤字脱字は生温かい目でスルーしてください。
読みにくいのは仕様です。

蘇る記憶は、何時も美しい。

誰にも犯されることなく、燦然と輝いている。

赤い薔薇を見ながら、一人そっと微笑んだ。

思い出すのは、あの時の約束……。

其処は、真っ白な薔薇が咲く小さな庭園。

私はまだ幼くて、世界のことなんて全く知らなくて、この庭園が私の全てだった。

お母さんも、お父さんも、仕事ばかりでほとんど逢えなかった。もう顔も覚えていない。

でも、庭園に吹く微風は、私の処へ来ては白薔薇の香りをプレゼントしてくれた。鳥達の囀りは、まるで私が生まれたことを祝福しているかのように聞こえた。木々達は私の為に木陰を作ってくれた。皆は私を優しく包んでくれた。

お母さんやお父さんが居なくても、平気だった。

そんな中に、貴方も居た。

庭園の真ん中にある、白薔薇に囲まれた椅子に座って、静かに本を読んでいる。そんな貴方は私の頭をそっと撫でてくれた。

『君はこの薔薇が好きかい？』

貴方の声はとても心地良くて、甘く優しくかった。

『ええ、大好きよ。誰にも穢されない気高さを持っているもの。』私がそう言ったら、貴方は哀しそうに微笑んだ。そのあとに貴方がこう言ったのを私は覚えている。

『僕は嫌いなんだ、この白薔薇……。どんな色にも染まってしまう、弱い華だ。自分の意思を持つことの出来ない色だ。だから、白薔薇は嫌いだ。』

その低い声に、私は恐怖した。でも、その日を境に、私は白薔薇

が嫌いになった。その時は何故嫌いになったのか分からなかったけれど、今なら分かる。

私は貴方が好きだったの。

好きな人と同じモノを好きになりたい。

唯それだけだったのよ。

貴方は私に見向きもしてくれなかったけれど、貴方と過ごした時間はとても幸せだった。あの微風も、鳥達の囀りも、木陰を作った木々達も、貴方の存在には勝てなかった。

気がついた時は、貴方だけが私の世界になっていた。だから、貴方が居なくなると聞いた時は、気が狂いそうになったわ。

貴方のいない世界で私はどんな風に生きればいいのか分からなかった。苦しくて哀しくて、どうすればいいのか分からなかった。

そんな時、貴方はこう言ってくれた。

『この白薔薇が赤く染まるとき、僕は帰ってくるよ』

その言葉は私に魔法をかけてくれた。ずっとここで待っていてられる魔法。

『約束…、してくれる？』

私はそう言って小指を指し出した。

貴方の大きな指が絡まって、私と永遠の約束をしてくれた。

『ああ、きつと、僕は戻ってくるよ』

そう言って貴方はこの庭園を去っていた。

私はまだ覚えている。

あの時絡めた指の暖かさを、忘れることは出来ない。

私はその日から赤い絵の具を使って薔薇を染めていったの。でも、絵の具だと雨で流れてしまったり、薔薇が枯れてしまったりした。どんな手を施しても白薔薇は赤く染まってくれなかった。

それから1年が経ったある日、私が怪我をしてしまって、近くにあった白薔薇が血で汚れてしまった。

白薔薇が、赤く、染まった――…。

あの時の約束が果たされたと思ったわ。でも、貴方が帰ってくることはなかった。

その時気がついたの。この庭園の白薔薇が全部赤く染まってしまえば貴方が帰ってくるんじゃないかなって……。

私は自分の血を使って薔薇を染めたわ。

思った通り、薔薇は赤く染まってくれたの。

でも、私だけの血では、全然足りなかった。

そんな時とても良い材料を見つけたのよ。私よりも大きくて捕まえるのが大変だけど、声をかければ必ず来てくれる。私のお屋敷には沢山いて、少しくらい居なくなっても、誰も気がつかないの。だから、私は小さな小部屋に呼び込んで捕まえた。

叫び声が大きくて五月蠅かったけれど、それを引き裂いたら、沢山の赤い絵の具が出てきて白薔薇は簡単に赤く染まったわ。

引き裂くのはとても大変で、大きな鉋や斧、沢山の道具を使ったの。重くて大変だったわ。

その絵の具はね、使った後はベトベトして気持ち悪いけれど、貴方に会う為だからどんな事も我慢できた。

使い切ったら白薔薇の側に埋めて、栄養にしたの。白薔薇はすくすく成長するのよ。

貴方にも見せてあげたいわ。でも、白薔薇がまだ赤く染まりきっていないから、貴方は帰って来られないのよね。

もう少しだから、待っていてね。約束通り全部の白薔薇を赤く染めてしまうから。

其処は赤黒く染まっていた。原色が何だったのか判別出来ないほど、染まっていた。朽ち果てた屋敷に人の気配はなく、不気味なほどに静まり返っていた。

崩れ落ちた外壁。枯れ果てた木々。

罅割れた窓ガラス。引き裂かれたカーテン。

其処を吹き抜ける風は、錆びた鉄の臭いと、遍く腐臭を運んでくる。それは、屋敷の奥にある庭園からの贈り物。かつては美しく咲き乱れていた白薔薇、しかし今は、その面影は何処にもない。

赤く、染まっていた。みどり

青々と栄えていた翠は枯れ果て、地面が剥き出しになっていた。その地面は所々が盛り上がり、白骨化した白い腕が手招きをするように突き出して（ ）いる。その庭園の真ん中に、少女は一人、立っていた。深紅のドレスを身に纏い、赤薔薇を抱きしめて、愛しい人と抱擁しているように、微笑んでいた。

あれからどれくらいの時が経ったのかしら？

ねえ、約束は守ったのよ。

貴方は何時になったら現れるの？

白薔薇は赤く染まったわ。

貴方はまだ現われないの？

それともまだ染めたりないのかしら？

ああ、時間が経って、また黒くなってしまおう。

新しい材料を調達しなきゃ。

せっかくの赤が台無しになってしまおう。

貴方が帰って来られなくなってしまう。

何も知らない小さな子供が、屋敷の中へ迷い込んだ。

少女はくすりと微笑んだ。

あら、ちょうど良い材料が――…。

まずは舌を切らないと、五月蠅いのは嫌だもの。

その後は逃げられないように足を切って。

次は暴れないように腕を切って。

最後は、沢山の絵の具が出る胸を刺して。

白薔薇を染めて使い切ったら、庭に埋めないと。

上手く染まったかしら？

ああ、綺麗な赤薔薇。

これなら貴方も喜ぶわ。

もうすぐ、逢える。

そしたら貴方に言うのよ。

愛していますって。

貴方は何て言うのかしら？

貴方に逢いたいわ。

どんな返事をくれるの？

早く貴方に逢いたい。

早く此処に来て。

赤薔薇を抱きしめる少女は、そっと微笑む。

愛しいあの人を待って。

美しい想い出に浸りながら、優しく微笑む。

愛しいあの人を想って。

遠い昔の約束を果たす為に、薔薇を染める。
愛しいあの人に逢う為。

そして少女は――……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4748y/>

薔薇乙女

2011年11月17日18時04分発行